

書評「歴史から探る21世紀の巨大地震―揺さぶられる日本列島」
（寒川 旭著，朝日新書 392，朝日新聞出版，2013年3月，288ページ，新書判，定価：820円（税別），ISBN978-4022734921 C0244）評・小出
仁（2013）地学雑誌，（地学ニュース）投稿中

寒川 旭：歴史から探る21世紀の巨大地震―揺さぶられる日本列島
（朝日新書 392），朝日新聞出版，2013年3月，288ページ，新書判，
定価：820円（税別），ISBN978-4022734921 C0244

2011年3月11日の東日本大震災以来，歴史地震研究と津波堆積物調査そして地震考古学の重要性が広く認識されるようになった。著者は地震考古学の創始者で，日本各地の遺跡に刻み込まれた地震の痕跡をコツコツと調査し，様々な事例を収集してきた。数多い昔の文献に残された地震に関わる文字記録と遺跡に発見される地震痕跡を用いて，日本列島の地震とそれによる被害の歴史を明らかにしようと試みている。歴史上特に地震が多かった時代がいくつかあることを指摘し，21世紀は平安時代はじめの9世紀と地震の起こり方が似ていると警告している。東日本各地で内陸地震が続いてから2011年に巨大なプレート境界型の東北地方太平洋沖地震(M9.0)が発生したという流れが，9世紀初頭から869年東北地方（当時の陸奥）太平洋沖の巨大な貞観地震にいたる道筋と似ているという。9世紀には，貞観地震の9年後の878年に南関東で大地震が発生し，そのまた9年後の887年に南海トラフ全体からの巨大な仁和南海地震が発生した。871年には鳥海山が噴火し，富士山もその前の864年から噴火している。21世紀の地震・火山活動が9世紀とまったく同じではないとしても，大局的に似た道筋をたどる危険は高いので，南関東や南海トラフの

巨大地震や内陸の地震の発生にも警戒が必要であろう。

本書176ページの(図3-2)「南海トラフの巨大地震年表」と、同じ著者の旧著「地震考古学—遺跡が語る地震の歴史」(寒川, 1992)の53ページの図14「南海地震と東海地震の発生時期」を比べてみると20年間の地震考古学の蓄積が一目で判る。新しい図では、“団子”(黒丸:遺跡で見つかった地震跡)の数が著しく増加し、“串”(文献記録から推定される震源範囲)から大きくあふれ出ている。文献に欠けている地震情報を遺跡調査で補うと、90年から150年の間隔で南海トラフの巨大地震が何度も発生していることが明瞭に読み取れる。また、南海地震と東海地震(または東南海地震)が同時または近接して発生していることも判る。記録に残るもっとも古い684年の白鳳南海地震より前から巨大地震が何度も発生していることも遺跡の地震痕跡から明らかになる。

南海トラフの巨大地震は少なくとも2000年もの間、繰り返し発生しているので、将来も発生すると予測せざるをえない。直近の南海トラフの地震は約70年前に発生した1944年東南海地震と1946年南海地震である。南海トラフ巨大地震の発生間隔は変動が大きいので、ピンポイントの地震予知はできないが、数10年の誤差があるだけに、そろそろ次の南海トラフ巨大地震を警戒しなければならない時期になっている。日本列島も地震の多い時代と比較的少ない時代を繰り返している。21世紀が大地動乱の時代であった9世紀に似ているという指摘は妥当に見えるが、きわめて恐ろしい重大な警告でもある。東日本大震災の痛手が十分に癒えない間に、関東や西日本に巨大地震が発生すれば、国家存亡の危機になりかねない。しかし、東日本大震災の教訓の一つは、科学者は最悪の予想でも、科学的に可

能性があるなら，社会に事実を伝えるべきであるということである。事実を直視して冷静に正しく恐れることが防災の第一歩だからである。

地震考古学は過去の地震による被害の状況も読み取ることができるので，地震防災にも役立つ情報を与えてくれる。文明の進展につれて地震の被害も軽減されると思うのは錯覚であって，都市の拡大や交通機関やインフラの高度化や石油製品の氾濫が地震被害の高度化をもたらす。過去は未来を知る鍵であるから，日本列島の地震と被害の歴史を知ることは，地震列島に暮らしている我々に欠くことができない。東京から名古屋・大阪・瀬戸内へと連なる太平洋ベルト地帯は世界的にも未経験の高度に集積したハイテク・メガロポリスになっていて，日本の人口・産業の多くが集中している。約300年前に相次いで当時の太平洋ベルト地帯を直撃した元禄関東地震や宝永地震が再来すればどのような状況になるか，過去の被害と現在の変貌を考慮して予測し，少しでも被害を軽減する方策を立てるべきである。

日本には多数の古い文献や遺跡が残されている。まだ見逃され，あるいは埋もれている遺跡の地震痕跡は多数潜在しているであろう。文献や遺跡だけでなく，堆積物とか木の年輪とか地すべりとかあるいは断層そのもののような自然物にも地震の痕跡は残っている。地震防災のための古地震研究の緊急性を思えば，遺跡の掘削調査や堆積物のボーリング調査や断層のトレンチ調査など，積極的に地震の痕跡を掘り出して，あらゆる手法を集めて過去の地震と被害の全貌を明らかにする必要がある。歴史地震学や地震考古学や地震地質学などを総合した学際的な古地震学の組織的な調査研究の実施

が待望される。

文 献

寒川 旭(1992) 地震考古学—遺跡が語る地震の歴史(中公新書
1096), 中央公論社, 256p.

(小出 仁)